

懸賞論文の選考について

懸賞論文は個人執筆論文と共同執筆論文部門に分けて審査し、それぞれの最優秀論文に賞状と副賞が授与される。個人執筆論文部門に5本、共同執筆論文部門に8本、計13本の応募があった。選考委員会の審査と教授会の議とを経て以下の論文に賞を与えることになった。

経済学部懸賞論文受賞者と論文名

< 個人執筆論文部門 >

竹内浩也（栗田 匡相ゼミ）

ブラジル製造業の生産性の要因分析～確率的フロンティア分析を用いて～

< 共同執筆論文部門 >

大上友里・川戸翔吾・高濱翔平・廣瀬美穂・松下実加・松村枝里乃（栗田匡相ゼミ）

マダガスカルにおける稲作技術

～確率的フロンティア分析を用いた PAPRIZ の非効率性の分析～

< 講評 >

個人執筆論文は、新興市場国 BRICs の1つとして注目を集めるブラジル経済が直面する問題（ブラジルコスト）について研究したものである。ブラジルコストとは、国内の過剰な規制や貧弱なインフラに起因するブラジル特有のコストの総称である。本研究では、ブラジル製造業の企業レベルのデータを用いて計量分析を行い、関税の高さや輸送インフラの貧弱さが企業の生産性に悪影響を与えていることを明らかにしている。ブラジルコストを実証的に明らかにしようとする問題意識、用いられた生産性分析の手法は、いずれも学部学生の論文として優れたものであるとして、高く評価された。

共同執筆論文は、JICA がマダガスカルで導入を進めている新しい稲作技術（PAPRIZ）について研究したものである。現地での詳細なアンケート調査から得たデータを用いて計量分析を行い、現地の農家が新しい稲作技術を採用する要因として、農地の大きさや世帯主のリスクに対する積極性が重要であることを明らかにしている。また携帯電話の利用頻度や技術の伝達経路の違いが、新しい稲作技術導入後の生産性に影響を与えることを明らかにしている。これらの分析結果をふまえ、新しい稲作技術普及のための政策提言（マイクロファイナンスの利用、小規模なモデル農家の育成）を行っている。本論文は、問題意識の明確さ、データのオリジナリティ、堅実な分析手法の点で優れたグループ研究であるとして高く評価された。以上が優秀論文について講評である。

（懸賞論文選考委員会委員長 河野 正道）